様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５８７０１５２

研究課題名（和文）クラカウアーとアドルノの映像メディア論におけるオルタナティヴ・メディアへの志向

研究課題名（英文）Orientation towards alternative media in Kracauer's and Adorno's thoughts on image media

研究代表者
竹峰　義和（TAKEMINE, Yoshikazu）

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：２０５５１６０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究によって以下の３点が明らかとなった。1. クラカウアーとアドルノの双方のファシズム・プロパガンダ論に〈擬態〉と〈パフォーマティヴィティ〉という非明示的な特徴がある。2. アドルノの「モンタージュ」概念とクラカウアーの「リアリズム」の概念のうちに、複数の時間性の交錯という共通するモティーフが潜在している。3. ベンヤミン、クラカウアー、アドルノ、クルーゲにいたるフランクフルト学派のメディア論の系譜のなかに、〈知覚媒体〉としてテクノロジー・メディアを捉えるという視座が貫徹されている。

研究成果の概要（英文）：The results of my research can be summarized as follows: 1) In the essays about fascist propaganda, Kracauer and Adorno implicitly used “mimicry” and “performativity” as writing strategies. 2) The concept of “montage” by Adorno shared the motif of “temporal imbrications” with “realism” by Kracauer. 3) There was a consistent understanding of technological media as “medium of perception” in the thoughts of Frankfurt School theorists from Benjamin, Kracauer, and Adorno to Kluge.

研究分野：ドイツ思想史

キーワード：批判理論　メディア　プロパガンダ　フランクフルト学派　知覚　テクノロジー　アドルノ　クラカウアー

１．研究開始当初の背景

フランクフルト学派の思想家として知られる、Ｓ・クラカウアー（1889-1966）と Th・Ｗ・アドルノ（1903-69）は、ともにテクノロジー・メディアに深い思弁的関心を抱き、さまざまな考察を重ねてきた。その対象は、写真、ラジオ、映画、映画音楽など多岐に及ぶが、彼らの主要な問題の一つが、大衆社会においてメディアが果たすプロパガンダ装置としての機能だった。とりわけ、1933 年にナチス・ドイツが政権掌握することで国外亡命を余儀なくされた彼らは、ファシズム勢力の圧倒的な隆盛の原因を探るべく、メディア・プロパガンダの理論的・実証的な研究に精力を傾注するようになる。何よりも特筆すべきは、そこでの考察対象は、ファシストの政治言説や扇動技術にとどまることなく、メディアによって規定される大衆消費社会一般にまでおよんでいるという点であり、公共圏のなかで大衆が主体性を再構築するためのプログラムや、そこでメディアが果たすべき機能をめぐって、さまざまな思考が展開されているのである。本研究の目的は、彼らの映像メディアをめぐる思考のなかで、1．プロパガンダ装置としてのメディアの批判的分析から、〈他なるもの〉への知覚への回路を開くような新たなメディアの姿を模索する方向へと徐々にシフトしていったこと　2．その転換にあたってモンタージュへの評価の変化が決定的な役割を果たしていたこと の２点を、フランクフルト学派の思想的文脈のなかで示すことにある。そのようなアプローチは、「啓蒙の自己崩壊」（アドルノ）をめぐるペシミスティックな時代診断とは異なる、大衆社会におけるメディアの新たな形態や機能への思考を開くという意味で、とかく非実践的な抽象的思弁として片づけられがちであったフランクフルト学派の思想が、現代においてもちうる射程を明らかにすることができるだろう。

２．研究の目的

(1)<u>クラカウアーの映像プロパガンダ論の成立におけるアドルノの批判的関与の検証</u>　クラカウアーは 1937 年に最初の映像プロパガンダ論を執筆して以降、とりわけ 1940 年代にこの主題に集中的に取り組んだ。だが、その成立にはアドルノが深く関与していたのであり、二人は、執筆計画や草稿について批判的議論を重ねるなかで、メディア煽動の心理的メカニズムや、映像メディアの批判的・教育的な可能性をめぐって、それぞれが独自の思想を練り上げていったのである。本研究では、クラカウアーのメディア・プロパガンダ論について、未刊行の草稿や書簡を含めた関連資料を調査するなかで、その成立にアドルノがおよぼした影響を精査したうえで、アドルノのラジオ煽動演説論（1943）やナチスや人種主義者の宣伝手法をめぐる複数の研究計画書（1940-45）などと比較することで、両者のプロパガンダ分析の共通点と差異について検証する。

(2)<u>モンタージュの両義的位相に見る映像メディア観の変化の解明</u>　1940 年代のクラカウアーとアドルノのプロパガンダ論は、基本的に、ファシズムによる意識操作のトリックを分かりやすく解説することで、大衆のうちに批判的意識を涵養するという啓蒙的な企図に基づいていた。だが、1950 年代以降、両者の映像メディア論は、プロパガンダという主題をしばしば扱いながらも、大衆啓蒙的な色彩は後退し、かわって、〈他なるもの〉――「物質的現実」（クラカウアー）、「非同一的なもの」（アドルノ）――を知覚・経験させるという〈媒体〉としての役割が強調されるようになる。本研究は、モンタージュの機能にたいする両者の評価のうちに、１．イデオロギー的な意味作用の強化　２．意味作用に空隙を穿つような説話的連続性の断絶　という相対立する二つの要素が含まれていることを明らかにしたうえで、50 年代以降の二人の映像論が、徐々に後者の機能を重視する方向へとシフトしたことを示す。

(3)<u>フランクフルト学派の思想におけるオルタナティヴ・メディア論の系譜の解明</u>　クラカウアーとアドルノの後期の映像メディア論において新たに浮上してくる、〈他なるもの〉の知覚媒体としてのメディアという視座は、1920 年代のクラカウアーの写真論や、1930 年代のベンヤミンの複製技術論のなかに、すでにその萌芽がうかがえるものであり、さらに、1970 年代以降のクルーゲの「対抗公共圏」論において明確に前景化することとなる。本研究では、フランクフルト学派の映像メディア論を、オルタナティヴ・メディアへの志向という視座からたどることによって、クラカウアーとアドルノのプロパガンダとモンタージュをめぐる思想を系譜的に位置づけなおす。

３．研究の方法

本研究は、次の三つのプロセスをつうじて遂行される。

(1) 1930-1940 年代のクラカウアーとアドルノのプロパガンダ論の比較考察
(2) 1950-60 年代の両者の映像論におけるモンタージュの位相の解明
(3) フランクフルト学派におけるオルタナティヴ・メディア論の思想的系譜の検証

これによって、クラカウアーとアドルノのプロパガンダ論の理論的・思想史的な内実と、両者の方法論的な影響関係、フランクフルト学派の思想的文脈内の位置が明らかとなる。

(1) クラカウアーとアドルノのプロパガンダ論における〈擬態〉と〈パフォーマティヴィティ〉

クラカウアーとアドルノは、1930-40 年代

にかけて、とりわけ亡命先のアメリカにおいて、いくつかのプロパガンダ論を執筆した。たとえばクラカウアーは、「大衆とプロパガンダ」（1936）、「ドイツとイタリアの全体主義プロパガンダ」（1937）、「プロパガンダとナチスの戦争映画」（1942）など、狭義におけるプロパガンダ論を執筆するとともに、「マルセイユ草稿」と呼ばれる映画理論についての草稿（1938）や『カリガリからヒトラーへ』（1947）などにおいても、映像メディアをもちいたナチス・ドイツのプロパガンダについて考察を展開した。また、アドルノは、クラカウアーのプロパガンダ論の成立（とりわけ「大衆とプロパガンダ」と「ドイツとイタリアの全体主義プロパガンダ」）の過程に密接に関与するとともに、みずからも、主にアメリカ・ユダヤ人委員会（AJS）の後援による反ユダヤ主義調査プロジェクトの枠内で、「国民社会主義と反ユダヤ主義」（1940）、「マーティン・ルーサー・トーマスのラジオ演説の心理学的テクニック」（1943-44）などを執筆。戦後になってもアドルノは、権威主義研究の補論というかたちで、「反ユダヤ主義とファシスト・プロパガンダ」（1946）、「民主主義的リーダーシップと大衆操作」（1949）、「フロイト理論とファシスト・プロパガンダの類型」（1951）などの英語論文を発表しつづけたのである。

そこでは、クラカウアーがもっぱら映像分析を基軸としているのにたいして、アドルノはファシスト指導者や煽動家の言説分析を中心に据えているという相違が見られる。また、方法論についても、アドルノの場合はあからさまにフロイト理論に立脚して議論を展開しているのにたいして、クラカウアーは、歴史情勢を踏まえた大衆心理学的な側面や、イデオロギー的な意味作用とそれを支える映像・説話技法に焦点をあてる傾向が強い。だが、両者のプロパガンダ論に共通しているのは、彼らのテクストの主要な特徴をなす思弁的な表現や弁証法的な飛躍といった要素は後退し、かわって、英米の社会心理学的な研究論文のスタイルを意図的に擬態するかのような文体によって貫徹されているという点である。このような特徴については、従来の研究では、アメリカ流の実証主義的なディシプリンにたいする妥協的な迎合として否定的に扱われがちであるが、本研究をつうじて明らかになったのは、クラカウアーとアドルノの双方のプロパガンダ論において、〈擬態〉というミメーシス的な手法をつうじて、分析対象となるファシズム・プロパガンダの手法や本質を疑似的に知覚・経験させるという言説戦略が密かに展開されているという事実である。

たとえばクラカウアーの「プロパガンダとナチスの戦争映画」（1942）では、ナチスの戦意高揚映画のさまざまな特徴が幾つもの具体例をつうじて詳細に記述・分析されるなかで、いうなれば一本の理念型としてのファシズム・プロパガンダ映画作品が言説によって再構成される。だが、議論の最後にクラカウアーは、ナチス占領下の無人パリを写したドイツのニュース映像の一場面を例に、ナチスのプロパガンダの「空虚さ」が印象的なイメージとともに強調されることで、ニュース映像を恣意的に利用することで特定のメッセージを観客の脳裏に刻みつけるというナチスの映像プロパガンダの手法をみずから積極的に活用するのである。また、アドルノのトーマス論には、そもそもファシズム・プロパガンダから大衆を守るための「マニュアル作成」のための準備という含意が込められていたのであり、「典型的な［反ユダヤ主義プロパガンダの］テクニックのすべてを［…］リストアップし、強烈でキャッチ―な見出しをつけ、個々のケースで作用している心理学的なメカニズムを素描する」というその手法は、敵の手段を利用したカウンター・プロパガンダのそれ以外の何ものでもないと言えよう。

本研究ではさらに、とりわけアドルノのプロパガンダ分析に見られる〈対象への擬態〉と〈カウンター・プロパガンダ〉という二つのモティーフが、アドルノ／ホルクハイマーの『啓蒙の弁証法』の文化産業批判に踏襲されていったという点を、テクストのパフォーマティヴィティという観点から明らかにした。このテクストでは、文化産業にたいする痛切な批判それ自体が、紋切り型のイメージの数々への還元という、きわめて文化産業的な手法によって成立しているのであり、テクスト上で演じられるそのような〈擬態〉の身振りによって、文化産業がファシズムと密かに共有しているイデオロギー的な大衆操作のメカニズムがあぶり出される。そして、そこでは、〈誇張〉や〈交差配列〉といった修辞的な技法をつうじて読者の認識や知覚を揺さぶり、新たな思考の地平を能動的に切り開いていくというパフォーマティヴな効果が意図されているのである。

(2) モンタージュと時間性

フランクフルト学派の思想において、解釈者の〈いま・ここ〉のなかで複数の時間性がたがいに折り重なり、交錯しあう瞬間が、真に〈アクチュアル〉なものとして重視されてきた。それを典型的なかたちで示す概念が、たとえばベンヤミンの「アレゴリー」やアドルノの「自然史」であるわけだが、1930 年代以降のアドルノの音楽批評（たとえばクルト・ヴァイル、アルバン・ベルク、マーラーについての論考）のなかで「モンタージュ」が評価されるのも、過去の――ときにキッチュと堕した――音楽形式の諸断片が攪乱的に混入し、複数の時間性によって現在が侵食されることが、新たな意味作用の位相（アドルノはそれをしばしば「文字（Schrift）」ないしは「文字像（Schriftbild）」と形容する）を開示し、解釈者の側によるアレゴリー的な読

解を可能とするからにほかならない。その後、1940 年代に作曲家のハンス・アイスラーとの共著として執筆された映画音楽論（『映画のための作曲』（1943-44））では、視覚（映像）と聴覚（映画音楽）との弁証法的葛藤という点のうちに、映画メディアがイメージの虚偽性を自己是正・自己解体するという批判的な機能を見て取ったアドルノは、「映画の透かし絵」（1963）や『美学理論』（1961-69）において、映画を含めた芸術メディアにおけるイメージとモンタージュの問題について考察を重ねていくこととなる。

だが、モンタージュをめぐるアドルノの姿勢には、つねにある種のアンビヴァレンスが認められる。すなわち、晩年になってもモンタージュという手法に芸術表現上の可能性を託しつづけたアドルノであるが、その一方で、シュルレアリスムのモンタージュにたいしては、商業広告との親和性や慣れによる効果の喪失といった点を厳しく批判していた。また、文化産業批判の文脈においても、映像モンタージュによるイデオロギー的な意味作用について繰り返し指摘されている。モンタージュにたいするそのような批判的視座は、先に触れたクラカウアーのファシズム・プロパガンダ分析においてより顕著なかたちで認められるのであり、大衆にたいして顕在的・潜在的に作用する心理効果の数々について、具体的な編集上の操作についての分析も交えながら考察されているのである。

ただし、1920 年代から 30 年代前半にかけてのクラカウアーの映画にまつわるジャーナリズム的なテクストでは、モンタージュは必ずしも否定的に扱われていたわけではない。むしろ、テクノロジーに媒介された都市モダニズムを表現するとともに、そこで変容した大衆の知覚経験に対応する手法として、モンタージュを評価するような議論も随所で展開されている。それにたいして、晩年にクラカウアーが取り組んだ『映画の理論』（1960）では、よく知られているように、「物理的現実の救済」という鍵語のもとに、モンタージュに象徴されるような映画制作者の側による主観的・形式的な介入をできるかぎり禁欲することで、純粋な事物世界を表現するべきであるという唯物論的な「リアリズム」の立場が鮮明に打ち出される。ただし、本研究から明らかになったのは、そこで言われる「物理的現実」や「事物世界」が、ありのままの視覚的な現実世界や事物に単純に還元できるものではなく、触覚や聴覚、無意識や想像力、さらには過去の痕跡をも含んだ不均等で複層的なものとして理解されていることを鑑みるならば、後期クラカウアーの「リアリズム」のうちにも、複数の時間性の交錯というベンヤミン＝アドルノ的なモティーフを潜在的なレヴェルで確認することができるという点である。そして、遺著となった『歴史』においてクラカウアーは、歴史記述という主題をつうじて、時間性をめぐる問題――とりわけ、過去の再現と構成のアポリアという、モンタージュと密接に関連する問題――にあらためて大々的に取り組むのである。

(3)〈知覚媒体〉としてのテクノロジー・メディア――フランクフルト学派の思想的系譜において

『ドイツ哀悼劇の根源』までのベンヤミンのテクストにおいて、芸術作品とは、〈救済〉という究極のシニフィエを幾重にも暗号化したかたちで表現している判じ絵として表象されていると言えるだろう。そして、特権的な解釈主体――そのモデルとなるのがバロック時代のメランコリカーである――の観想的な介入をつうじて、そこに埋め込まれたメッセージがはじめて解き明かされるのである。それをかりに〈救済〉の解釈学的モデルと呼ぶならば、「複製技術時代の芸術作品について」に代表される一九三〇年代の論考において前景化してくるのは、不特定多数の大衆という集団的主体によって感性的・非認識論的なレヴェルで知覚される〈救済〉というモデルであり、複製技術論文における「知覚に関する学」としての「美学」という規定にならって 、それを〈救済〉の美学的モデルと呼ぶことができるだろう。ここにおいて〈媒体〉は、「人間の知覚が組織される方法――人間の知覚を生じさせる媒体」 として、狭義の言語のみならず、映画のようなテクノロジー・メディアや、それによって伝播されるイメージ全般――狭義の映像を含む――を包含するようになる。ただし、ここで見逃してはならないのは、過去・現在・未来の重なり合いというモティーフが決定的な重要性を帯びていることという点である。ベンヤミンが映画をというメディアを特権視したのも、それが複製テクノロジーとモンタージュによって複数の断片化された過去を現在へと召喚するとともに、映像として現在化された過去を、「気散じ」状態の大衆が何度も繰り返し受容し、知覚することを可能とするからなのである。

それにたいして、これまでアドルノの芸術哲学については、卑俗な大衆社会の彼岸において、後期資本主義体制が抱える諸矛盾を内在的に表象＝認識しつつも、「絶対的に忘却される」ことをみずから希求する「投壜通信」としての芸術作品という理念が主導的であることが強調されてきた。だが、本研究が立証したのは、後期アドルノの芸術思想のなかで、「非同一的なもの」を媒介し、鑑賞者に無意識的・身体的なレヴェルで知覚させるという新たな芸術作品のモデルが、比喩的なかたちで示されているという事実である。後期アドルノの美学的認識にとって、芸術作品の使命とは、自律的な形式構造のなかで社会の苦境を否定的に表現するだけでは充分ではない。自然支配の暴力によって徹底的に抑圧・排除された「非同一的なものの痕跡」を、

美的経験をつうじて「再生産＝複製」し、鑑賞者にたいして知覚・追想させることが、あらゆる芸術作品の美学的課題なのであって、そのカテゴリーのうちには、モダニズム芸術作品のみならず、複製テクノロジーに媒介された狭義のメディアも含まれているのだ。そして、映画メディアを一種の〈知覚媒体〉として捉えるという視座は、1920 年代の写真論から映画理論にいたるまでのクラカウアーの映像メディア論の基盤となっている。そこで問題となっていたのは、簡潔に表現するならば、非同質的で偶発的なものとしての〈生〉の流れを、ときに矛盾しあう複数の時間性の層において知覚・経験することであり、つまりはテクノロジー・メディアを介して（複数の）歴史に身を晒すことにほかならないと言えるだろう。さらに、このような〈知覚媒体〉としてのテクノロジー・メディアという、ベンヤミン／アドルノ／クラカウアーを結びつけるモティーフは、さらに 1970 年代以降、アドルノの弟子にあたる映像作家・メディア思想家のアレクサンダー・クルーゲによって受け継がれ、『公共圏と経験』（1972）や『歴史と我意』（1981）などの理論書や、1980 年代後半から現在にいたるまで継続されているＴＶプロデューサーとしての仕事に結実していくのである。

４．研究成果

以上のような研究成果のうち、アドルノおよびベンヤミン、クルーゲに関する部分については、2016 年 7 月に東京大学出版会から刊行予定の単著『〈救済〉のメーディウム――ベンヤミン、アドルノ、クルーゲ』（450 頁を予定）にまとめたほか、ドイツ語の研究論文「Beschwörung der filmischen Gespenster：Zu Theodor W. Adornos Reflexionen über technische Medien」として発表した。くわえて、クラカウアーの映画論との関連において、ヴァイマル時代からナチス時代にかけての映画作品を考察した論考を収録した共著・共編著を４冊刊行した。クラカウアーとアドルノとの思想的な関係については、単著としてまとめることを計画しており、現在その準備を進めている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① Yoshikazu TAKEMINE, “Beschwörung der filmischen Gespenster: Zu Theodor W. Adornos Reflexionen über technische Medien“（映画的亡霊の召喚：テオドール・W・アドルノの複製メディア論についての考察）『言語・情報・テクスト（東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要）』 第 21 号、pp.1-13、2014 年

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計５件）

① 竹峰義和『〈救済〉のメーディウム――ベンヤン、アドルノ、クルーゲ』（東京大学出版会）印刷中、450pp.（予定）

② Bruno Pucci et.al.(ed.), *Teoria Critica na Era Digital*（デジタル時代の批判理論）(Publicado em janeiro、ブラジル)
執筆担当: Yoshikazu TAKEMINE, „Emancipação das imagens fílmicas: Montagem em Theodor W. Adorno e Alexander Kluge“（映像の解放：テオドール・W・アドルノとアレクサンダー・クルーゲにおけるモンタージュ）pp.141-150, 2015 年

③ 真野倫平編『近代科学と芸術創造／１９～２０世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係』（行路社）
執筆担当: 竹峰義和「犯行現場としての心――G・W・パプスト『心の不思議』をめぐって」、pp.231-258、2015 年

④ 鍛治哲郎／竹峰義和編『陶酔とテクノロジーの美学：ドイツ文化の諸相 1900-1933』（青弓社）
執筆担当: 第２章 竹峰義和「「おまえはカリガリにならなければならない！」――ヴァイマール映画における陶酔と越境の契機をめぐる一考察」、pp. 231-258、2014 年

⑤ 堀潤之／菅原慶乃編『越境の映画史』（関西大学出版部）
執筆担当：第５章 竹峰義和「西部への呼び声――ナチス時代のルイス・トレンカーの越境的活動をめぐって」pp.169-209、2014 年

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

竹峰 義和（TAKEMINE, Yoshikazu）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：20551609

(2)研究分担者: なし